



乳幼児の保護者の主観的幸福感や自然に対する肯定的態度と教育観との関係

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田口, 夏美, 能條, 歩, 田中, 住幸, 中本, 貴規, 陳, 倩倩, 板垣, 有咲 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007056

乳幼児の保護者の主観的幸福感や自然に対する肯定的態度と教育観との関係

田口 夏美・能條 歩・田中 住幸*・中本 貴規*・陳 倩倩・板垣 有咲

北海道教育大学岩見沢校環境教育学研究室

*飯田女子短期大学

The Relationship between Subjective Happiness, Affirmative Attitude toward Nature, and View on Education of Guardians of Infants

TAGUCHI Natsumi, NOJO Ayumu, TANAKA Sumiyuki*, NAKAMOTO Takanori*,
CHEN Qianqian and ITAGAKI Arisa

Laboratory of Environmental Education, Iwamizawa Campus, Hokkaido University of Education,

*Iida Women's Junior College

概 要

保護者の主観的幸福感や自然への肯定的態度が保護者の教育観に与える影響を明らかにするため、札幌市及び長野県飯田市の幼稚園・保育園・認定こども園を対象とした調査を行った。その結果、主観的幸福感と自然への肯定的態度には正の相関があること、過去の自然体験が多いと主観的幸福感も高い傾向にあること、自然への肯定的態度と主観的幸福感が保護者の教育観に影響を与えること、などがわかった。これらのことから、自然体験が主観的幸福感を高めることで自然への態度を肯定的に変え、幼児に対する教育観にも影響することが期待される。また、今後それらの要因における因果関係を明らかにしていけば、持続可能な社会の実現を担う子どもたちに対する「自然に対する肯定的な態度」を育む教育環境の構築への示唆が得られるものと考えられる。

キーワード：幼児教育，主観的幸福感，自然に対する感情反応，自然との共生観，自然体験教育，自然への肯定的態度，保護者の教育観，保護者研究

1. はじめに

2015年に採択されたSDGsの17目標は、どれも環境・経済・社会の各側面が関係し、特に環境という意味での自然は全てに直接的または間接的に

関係している。これまでの自然体験に関する調査により、「自然体験活動をたくさん行った子どもほど、自然体験活動に対して肯定的なイメージをもっており、気になる環境問題の数が多いこと」（国立青少年教育振興機構，2004）や、「子ども

の頃の自然体験は、その直後だけでなく、大人になってからの共感性、意欲・関心、規範意識、人間関係能力などにも影響する可能性を示し、特に低学年であるほど、顕著であること」(国立青少年教育振興機構, 2010) が示されており、幼少期からたくさんの自然体験活動を経験することが、持続可能な社会の実現に必要な「自然に対する肯定的な感情や態度」を育てることが示唆されている。

一方、2009年にStiglitzらによって発表されSDGsの基となったBeyond GDPという概念は、「幸福 (well-being)」と「富 (wealth) の持続可能性 (sustainability)」の2つの軸から成っており、幸福は相互に影響する「個人の幸福」と「幸福の通時的な持続可能性」に分けられている(佐藤, 2012)。それらは様々な種類の富(自然資本、経済資本、人的資本、社会関係資本)の維持が必要であるとされているため、幸福も富もSDGsと同様に自然と連関しているものと捉えることができる。したがって、「個人の幸福」の要因のひとつである主観的幸福も、自然への親和的な感情や態度と相互に影響していると考えられるが、この両者の関係ははっきりしていない。

持続可能な社会をつくるには、未来を担う子どもたちがSDGsの達成に目を向けて行動するようになることが大切で、それには保護者がどのような教育環境を提供するかが重要である。「低学年の頃の自然体験が顕著に影響する」(国立青少年教育振興機構, 2010) ことや、子どもの学習・生活環境が保護者の設定する枠組みに縛られやすいことを考えると、保護者の主観的幸福や自然への肯定的態度が持続可能な社会づくりの担い手育成に大きく影響する可能性は否めない。特に、幼児期は保育園や幼稚園などで過ごすことが多く、園の選択基準は保護者の価値観に大きく依存する。このように、幼児期の生活環境が保護者の考えに大きく左右されることを考えると、保護者の主観的幸福や自然への肯定的態度が持続可能な社会づくりの担い手育成に大きく影響すると推察されるが、保育者の教育観や教育手法に関わる研

究は多いものの、保護者のそれに関する研究は非常に少ない。

そこで本研究では、保育園や幼稚園に通っている乳幼児の保護者を対象に、主観的幸福と自然への肯定的態度、教育観の調査を行い、それぞれの関係性を考察することとした。

2. 研究の目的

前述のように、本研究の目的は、持続可能な社会の実現を担うべき子どもたちに「自然に対する肯定的な態度」が育つことが重要であることから、保護者の主観的幸福感や自然観が乳幼児の教育環境に与える影響を明らかにすることである。

自然への肯定的態度が主観的幸福感を高めることや保護者の教育観を高める要因が主観的幸福感にあることが明らかになれば、保護者の自然への肯定的態度を高めることによって教育観が変わり、それにより幼児の自然体験が増えることで、持続可能な社会の担い手の育成が促進されるのではないかと考えることができる。さらに保護者自身の主観的幸福感も高くなることで生活の質が向上し、SDGsの目標達成に向けて積極的に行動することが期待されるため、本研究では以下の4つの仮説を立てて調査を行うこととした。

仮説1) 自然に対する態度が肯定的だと、主観的幸福感も高い。

仮説2) 過去の自然体験が現在の主観的幸福感の高低に影響する。

仮説3) 自然に対する態度は保護者の(乳幼児に対する)教育観に影響する。

仮説4) 主観的幸福感が保護者の(乳幼児に対する)教育観に影響する。

3. 先行研究

3-1. 主観的幸福について

寺崎ら(1999)は、367人の大学生に対して人生に対する満足度質問紙と感情の特性尺度を実施し、主観的幸福感の構造について検討した。その

結果、満足度と感情尺度の因子分析により、単一の幸福概念が成立することが確認されて、「主観的な幸福感は、人生に対する満足感、肯定的感情、否定的感情の部分的に成立している3つの構成要素から成る単一次元である」と結論付けている。

伊藤ら（2004）は、子育て期と中年期の2つのライフステージにおける夫婦1882人（子育て期女性525人、子育て期男性352人、中年期女性522人、中年期男性483人）のデータにより、主観的幸福感、夫婦関係満足度、職場満足度、家計収入満足度を用いて分析を行った。その結果、子育て期の男女両方において夫婦関係満足度が主観的幸福感に影響を及ぼしていることや、専業主婦の場合は夫婦関係満足度の寄与が最も高くなっていることを示した。そして、子育て期での夫婦関係のあり方が中年期以上に主観的幸福感を大きく規定していることが明らかにされている。

佐々木（2013）は、主観的幸福度の規定要因について既に行われた研究をまとめ、生活習慣（喫煙、飲酒、ギャンブル、宝くじ、運動、外食）、行動（投票、ボランティア、募金・寄付、席を譲る）、年収、教育年数、婚姻、子持ち、健康状態、性格、年齢・性別において、主観的幸福度への影響がみられると述べている。

青木（2013）は、幼稚園児をもつ夫婦248組を対象に、協同育児、配偶者の育児に対する満足度、主観的幸福感などが含まれる質問紙調査を行い、夫婦が育児の計画における連携や調整を行い、育児行動の分担を衡平に行う協同育児と配偶者の育児への満足度が、主観的幸福感にどのような影響を及ぼすのかについて検討した。その結果、男女別の重回帰分析により、配偶者と育児の改革における連携や調整を図り、育児に関する情報や互いの意見を共有していることが、夫群・妻群のいずれにおいても配偶者の育児に対する満足度の高さにつながっていた。さらに、配偶者と育児の計画について連携や調整を図っていることは、心理的な健康状態のよさを意味する主観的幸福感を直接高めることも示している。

竹森・柏木（2018）は、学校・家庭・地域間ソー

シャルキャピタルと保護者の主観的幸福感について、西日本の34校（小学校18校、中学校15校、高校1校）の7737人の保護者を対象に調査している。その結果、保護者の有するソーシャルキャピタルの要素のうち、情報有用度、協力性、有能性評価の順で主観的幸福感に影響を与えていること、つまり、保護者と子どものやりとりやかかわりが豊かに成立しているほど、保護者の主観的幸福感が高まるといえると述べている。

小林（2020）は、世界的に見て主観的幸福感が高いブータン王国における就学前集団教育について現地調査を行った。調査対象の私立幼稚園3園に共通していたことは、保育料有料、園バス保有、3歳児以上を対象、文字の読み書きを実施、英語による授業、弁当・水筒持参、2種類（学習と遊び）の保育時間などであった。この2種類の保育時間があることは、現在の日本における認定こども園に近似しており、今後ブータン王国における就学前集団教育に関する研究を進めることで、日本の保育への貢献が期待されると述べている。

3-2. 自然への肯定的態度について

山本ら（2005）は、幼児期の豊富な自然体験活動が、その後の子どもたちの行動や発育発達にどのような影響を与えているのかを明らかにする目的で、自然の中での遊びや体験活動を数多くカリキュラムに取り入れているN市のK幼児教室に通っていた小学1年生から小学4年生の卒園児35名の保護者を対象とし、卒園児の自然体験活動の実態を全国調査（国立青少年教育振興機構、2004）と比較・分析した。その結果、

- ① K幼児教室卒園児は、全国調査における同年齢の子どもたちに比べて自然体験活動を多く行っている。
- ② K幼児教室卒園児の保護者は、全国調査における同年齢の子どもたちの保護者に比べて、自然体験活動に対する関心が高く、子どもたちにより積極的に自然体験活動を行うよう促している。
- ③ K幼児教室卒園児に見られる特徴として、運動能力や体力が高く、自然への理解が深い子どもであり、また望ましい生活習慣が身についている。

る子どもである等と評価している保護者が多い傾向にある。

と、述べている。

2014年度に実施された青少年の体験活動等に関する実態調査によると、自然体験をしたことのない子どもは、少ない子どもに比べて道徳観・正義感があり、自己肯定感も高く、自立的行動習慣についても自然体験をしたことのない子どもの方がより身につけているという（国立青少年教育振興機構、2016）。また、2016年度の青少年の体験活動等に関する意識調査では、1998年から2016年の18年間の小中学生の自然体験の変化について報告している。それによると、これまでに「海や川で泳いだこと」「夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たこと」「野鳥を見たり、鳴く声を聞いたこと」「チョウやトンボ、バッタなどの昆虫を捕まえたこと」「海や川で貝を採ったり、魚を釣ったりしたこと」「太陽が昇るところや沈むところを見たこと」などの自然体験をどれくらいしたことがありますかという質問に「何度もある」「少しある」と答えた割合は、1998年から2005年または2009年までずっと減少していたが、2012年以降からはおおむね増加しており、2016年には1998年と同程度の割合まで戻っている。また、「大きな木に登ったこと」「キャンプをしたこと」「ロープウェイやリフトを使わずに高い山に登ったこと」への「何度もある」「少しある」とした回答は、1998年から2005年または2009年にかけて減少し、その後2012年には1998年と同程度まで回復したが、2014年から2016年にかけて再びやや減少傾向にある（国立青少年教育振興機構、2019）。

山田ら（2020）は、森林環境における自然体験活動が、参加した子どもたちの生きる力と自然との共生観に及ぼす影響を検証した。分析対象者は保養活動であるふくしまキッズプログラムに参加した213名で、参加者全体において、プログラムによる生きる力および自然との共生観（自然への親和性、自然と生命の関係性、自然への興味と配慮）の向上効果が実証された。また、参加者のうち自然体験の経験が少ない子どもは、多い子ども

よりもプログラムによる向上効果がみられた。

3-3. 幼児の生活アンケートについて

ベネッセ総合研究所は、乳幼児の生活の様子と保護者の子育てに関する意識と実態を把握する目的で、1995年から計5回（1995年、2000年、2005年、2010年、2015年）の幼児の生活アンケートを実施している。2015年の第5回幼児の生活アンケート（以下、幼児の生活アンケート）は、時代による変化を把握できること、乳幼児の年齢による違いを把握できること、乳幼児の生活と保護者の子育てに関する幅広い内容を聞いていることが特徴で、首都圏（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）の0歳6か月～6歳就学前の乳幼児をもつ保護者4034人（配布7801通、回収率45.1%）を対象としている。その結果、「園児が家の外で過ごす平均時間は20年間で長くなっていること」や「この10年間で、自分の生き方より子育てを優先する母親、子どもといつも一緒になくても愛情をもって育てればいいと考える母親、文字や数はできるだけ早くから教えるのがよいと考える母親が増加していること」「15年前と比較して、子育てにおける将来への不安が高まっていること」などが明らかにになった（ベネッセ総合研究所、2016）。

4. 研究方法

4-1. 調査対象者及び調査方法

本研究では、立地環境や居住環境の異なる地域を比較検討するために、都市在住の保護者を中心とする札幌市と、信州やまほいくなどの自然保育を取り入れた教育施設を多く含む長野県飯田市を対象とした。調査対象者と調査の概要は以下の通りである。

〈対象〉札幌市の市立幼稚園9園と私立幼稚園・保育園7園および私立認定こども園5園、長野県飯田市の市立保育園16園と私立幼稚園・保育園14園および私立認定こども園6園に通う乳幼児の保護者及び園の代表者

〈方法〉保護者向けアンケート（世帯分）と園向けアンケートを各園に郵送し、園に保護者への配

布・回収を依頼して郵送にて回収

〈回収数〉保護者向けアンケートの札幌市と飯田市を合わせた配布数は5041部で、回収数は3507部（回収率は69.57%）であった。札幌市と飯田市の内訳は表1に示す。なお、調査時期は2020年8月7日～9月25日であった。

表1 アンケート配布数及び回収率

	配布数(部)	回収数(部)	回収率
札幌	2650	1760	66.42%
飯田	2391	1747	73.07%
合計	5041	3507	69.57%

4-2. 調査内容

アンケートは、乳幼児の生活の様子や保護者の子育てに関する意識と実態を捉えることを目的に実施した「幼児の生活アンケート」に主観的幸福感尺度（伊藤ら，2003）を加え、自然への肯定的態度を検証するために自然との共生観尺度（山田ら，2020）、自然に対する感情反応尺度（芝田，2016）の各尺度項目を加えた。そして、過去の自然体験について（国立青少年教育振興機構，2019）と新型コロナウイルスによる活動自粛期間中に子育てにおいて何か困ったこと・不安だったことの自由記述欄を追加した。また、園向けのアンケートは、「幼児の生活アンケート」の「子育てで力を入れていることを」参考に「園の教育で力を入れていること」の質問以外は、独自に作成した。質問内容は、「園の立地」「在園児数」「保育者数」「自然物の遊具」「園庭における自然体験のできる場所」「平日1日の外遊びの平均時間」「保育に関して気になること・心配なこと・疑問なこと」「新型コロナウイルスによる保育への影響」となっている^(注1)。

1) 子どもの状況と教育観

今回の調査では、保護者の主観的幸福感や自然への肯定的態度によって、乳幼児の生活や保護者の子育てに関する意識にどのような違いがあるのかを明らかにするために「幼児の生活アンケート」の項目を用いた。「幼児の生活アンケート」のう

ち今回採用した調査項目は、「子どもの基本的な生活時間」「家にあるもの」「家庭での生活」「子どもの遊び」「習い事」「教育費」「しつけや教育の情報源」「今、子育てで力を入れていること」「子どもの将来への期待」「子どもの発達状況」「通園について」「園を選ぶポイント」「園に対する要望」「子どもの両親の仕事について」「夫婦の家事・子育て分担」「子育てについて感じること」「保護者の教育観・子育て観」「子どもの存在」「現在の生活や子育ての満足度」「居住地域」「同居家族」「子どもの両親の年齢」「子どもの両親の最終学歴」である。また、本研究では「保護者の教育観・子育て観」を「教育観」として扱った（アンケートの間1～23まで。ただし12を除く）。各調査項目の選択肢など追加・変更したものは以下の通りである。

- ① テレビやゲームなどの時間→テレビや電子機器と変更：幼児期の生活では主にテレビ、DVDを用いると考えたため、その他の電子機器をまとめて聞くことにした。
- ② 子どもにとって必要だと思う遊びの質問を追加：子どもは遊びを通して様々な経験をし、それが学びにつながっていくため、梶木ら(2002)の遊び内容の項目を参考にし、独自に15項目を設定した（アンケートの間12）。
- ③ 子どもの将来への期待に項目追加：本研究の趣旨に沿うような「自然と共生する気持ちを持つ人」という項目と、幼児の生活アンケートを実施した2005年から15年経過していることを踏まえ、「国際的視野を持つ人」「平和を願う人」「思いやりのある人」の3項目、計4項目を追加した（アンケートの間13）。
- ④ 自宅周辺の自然環境についての質問を追加：居住地域が自然の多い場所でも、自宅周辺は他の家に囲まれている住宅街で、自然のある場所までは遠い場合も考えられる。身近で自然にふれあえるかどうかで本研究の調査結果も異なると考えたため、「徒歩圏内に子どもが自然にふれあえる場所がある」と「車で移動しなければ子どもが自然にふれあえることができない場所」

の自宅周辺の自然環境についての質問を追加した（アンケートの間²⁸）。

2) 主観的幸福感尺度 (Subjective Well-Being Scale ; SWBS)

持続可能な開発目標 (SDGs) の基になった Beyond GDPや2011年に始まったOECDのBetter Life Initiativeにおいて、主観的幸福は評価指標として外せないものになっている。持続可能な社会の実現にはこの主観的幸福も関係してくると考え、調査項目に取り入れた。

「主観的幸福感尺度」は、WHOの開発した「心の健康自己評価質問紙 (Subjective Well-Being Inventory : SUBI) の項目を整理することで、心理的健康を測定する尺度として作成され (伊藤ら, 2003), 個人の主観的な心理的健康を測定する特徴がある。質問項目は「人生に対する前向きな気持ち (1~3)」「自信 (4~6)」「達成感 (7~9)」「人生に対する失望感のなさ (10~12)」の4領域×3項目=12項目である。教示文は「あなたが毎日の生活のなかで、どのように感じているかをうかがいます。次にかかげる質問を読んで、あなたの気持ちに最も近い答えを1つ選び、○で囲んでください。」であり、各項目とも4段階評定となっている (「人生に対する失望感のなさ」については逆転項目)。選択肢は項目の内容に合わせて異なっている (アンケートの間²⁴)。

3) 自然との共生観尺度

持続可能な社会の実現を担う子どもたちには「自然に対する親和的な感情」が育まれることが重要である。子どもたちの教育環境には少なからず保護者の価値観や考えが影響する。そのため、保護者の自然に対する感情や態度を測定する項目として、「自然との共生観尺度」を採用した。「自然との共生観尺度」は、自然体験活動の教育的な意義をより広い視点でとらえるために、自然に対する態度の変容をみる目的で作成され (山田ら, 2020), 3因子9項目から構成されている。第1因子は5項目で、自然に対して親しみを感ずることから生まれる思いや感情を表す項目で構成される「自然への親和性 (1~5)」, 第2因子は2項目で、

自分の生命と自然との関係についての意識を表す項目で構成される「自然と生命の関係性 (6~7)」, 第3因子は2項目で、自然に対してやさしい行動を選択する上で基盤となる態度や考え方を表す項目で構成される「自然への興味と配慮 (8~9)」となっている。各項目については「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」まで6段階の間隔尺度となっている (アンケートの間²⁵)。

4) 自然に対する感情反応尺度

「自然に対する感情反応尺度」は、自然との心理的つながりに注目しながら、自然に対する感情反応をより包括的に評価するための尺度として作成されたもので (芝田, 2016), 上記の3) 自然との共生観尺度と同様な理由で採用した。この尺度は「回復感 (1~4)」「一体感 (5~8)」「神秘感 (9~12)」「関心・保護 (13~16)」「嫌悪感 (17~20)」の5因子×4項目=20項目からなり、「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」まで7段階の間隔尺度となっている (アンケートの間²⁶)。

5. 結果

以下に、調査結果の中から、本論に関する部分を紹介する。

5-1. 単純集計

1) 回答者と子どもの性別

回答者は、「母親」が94.67%, 「父親」が4.28%, 「その他 (施設職員や伯父)」が0.20%だった。対象となる子どもの性別の割合は、「男児」50.81%, 「女児」45.91%であった。

2) 現在の生活の満足度

「現在の生活に満足していますか」という問いに対しては、「とても満足している (24.38%)」「まあ満足している (64.33%)」と答えた人が全体の約9割を占めていた。

3) 教育観 (子育て・教育についての意識)

「子育てに関する気持ちはAとBの意見のどちらに近いか」の質問で50%以上の大差が見られたのは、③「A : 子どもの教育について、親が判断

して選ぶのがよい」14.64%／「B：子どもの教育について、子どもの自主性を重んじるのがよい」85.36%，④「A：世間で名の通った大学に通ってほしい」15.05%／「B：大学進学や学校名にはこだわらない」84.95%，⑥「A：子どもは生まれつき能力が決まっていると思う」10.46%／「B：子どもは育つ環境によってどのような能力も伸ばせると思う」89.54%，⑦「A：文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい」23.63%／「B：文字や数は子どもが関心をもつようになってから教えるのがよい」76.37%，の4項目であった。

4) 過去の自然体験

「これまで以下の自然体験をどのくらいしたことがあるか」という問いに対して「何度もある」の回答が多かったのは、「スキーや雪遊びなど雪の中での活動（52.98%）」のみであった。17項目中7項目（「植物や岩石を観察したり調べたりすること」「バードウォッチング」「山菜採りやキノコ・木の実などの採取」「魚を釣ったり貝を採ったりすること」「干物・くん製・ジャム作りなどの食品加工」「植林・間伐・下草刈りなどをする事」「牧場などで家畜の世話をすること」）は、「ほとんどない」の回答が最も多かった（図1）。

5-2. 統計学的分析

「主観的幸福感尺度」「自然との共生観尺度」

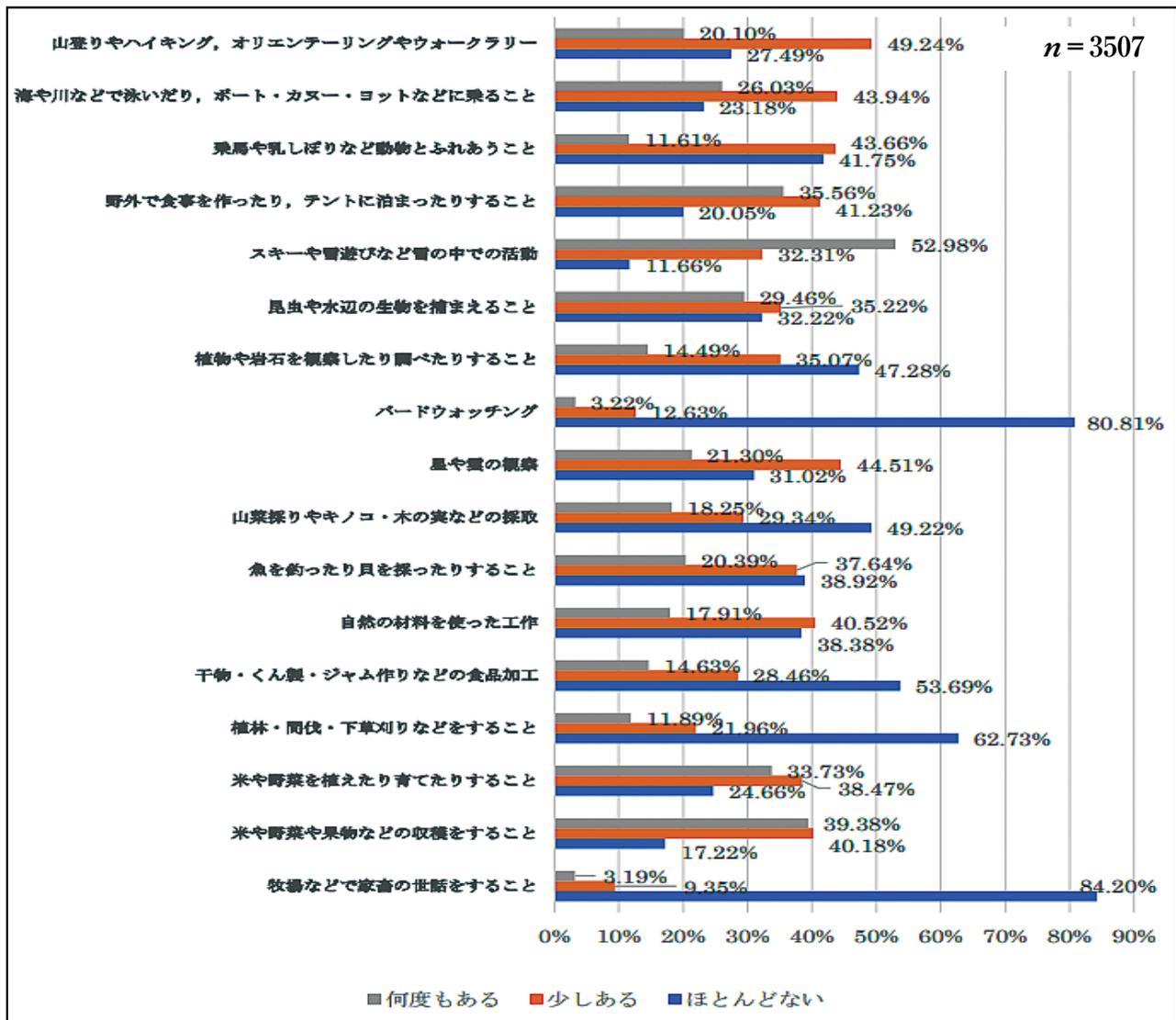


図1 過去の自然体験

「自然に対する感情反応尺度」の質問項目すべてにおいて欠損のない3193名を分析対象として各尺度を分析した。分析にはjs-STAR XR version 1.0.0jを用いた。なお、本論では $p < .05$ の場合に有意差があるものとみなした。

1) 主観的幸福感, 自然との共生観, 自然に対する感情反応

1) - 1 主観的幸福感

「主観的幸福感尺度」の12項目はすべて4件法であり、各項目で選択肢の言葉が異なっているが、「とてもあてはまる」にあたる選択肢を4点、「全くあてはまらない」にあたる選択肢を1点として、「人生に対する前向きな気持ち」「自信」「達成感」「人生に対する失望感のなさ」の下位尺度ごとに合計したものと、全てを合算した「主観的幸福感」を用いて平均点を算出した。なお、「人生に対する失望感」の質問項目は逆転項目であるため、4点を1点に、3点を2点に、2点を3点に、1点を4点に逆転させて集計した。各項目と全体の平均点は表2に示す。

「主観的幸福感尺度」を作成し、信頼性と妥当性を検討した伊藤ら(2003)が関東圏にある三つの大学・短大の学生520名とその親(社会人)に対して行った調査では、女性の場合、学生の平均が33.50で社会人は34.85、男性では学生の平均が32.05で社会人が35.24であった。今回の調査対象者は社会人のものとおおむね同じ結果といえる。

表2 主観的幸福感尺度の平均点(*は逆転項目)

	平均点	SD
人生に対する前向きな気持ち	9.73	1.48
1.あなたは人生が面白いと思えますか	3.07	0.59
2.過去と比較して、現在の生活は	3.36	0.58
3.ここ数年やってきたことを全体的に見て、あなたはどの程度幸せを感じていますか	3.30	0.57
自信	8.74	1.62
4.ものごとが思ったように進まない場合でも、あなたはその状況に適切に対処できると思いますか	3.21	0.65
5.急激的な状況(人生を狂わせるようなこと)に出会ったとき、自分が勇気を持ってそれに立ち向かって解決していけるという自信がありますか	2.71	0.69
6.今の調子でやっていけば、これから起きることにも対応できる自信がありますか	2.83	0.60
達成感	8.26	1.44
7.期待通りの生活水準や社会的地位を手に入れたと思いますか	2.75	0.63
8.これまでの程度成功したり出世したと感じていますか	2.66	0.61
9.自分がやろうとしたことはやりとげていますか	2.85	0.62
人生に対する失望感のなさ*	8.51	1.61
10.自分の人生は退屈だと面白くないと感じていますか*	2.97	0.68
11.将来のことが不安ですか*	2.24	0.67
12.自分の人生には意味がないと感じていますか*	3.28	1.03
合計	35.25	4.72

1) - 2 自然との共生観

「自然との共生観尺度」は9項目すべてが6件法で、「とてもあてはまる」を6点、「まったくあてはまらない」を1点として、「自然への親和性」「自然と生命の関係性」「自然への興味と配慮」の下位尺度ごとに合計したものと、全てを合算した「自然との共生観」を用いて平均点を算出した。各項目と全体の平均点は表3に示す。

福島県在住の子どもたちに対する保養活動(ふくしまキッズ)の参加者に対して探索的因子分解を行なって項目の構造を把握した山田ら(2020)の研究では、「自然との共生観尺度」の平均値が41.26となっている。山田ら(2020)の対象者が子どもであることを考慮すれば、これも大差ない結果と考えられる。

表3 自然との共生観尺度の平均点

	平均点	SD
自然への親和性	21.75	4.39
1.自然を守るために何かしたい	4.10	1.03
2.自然の中にいると気持ちが安らぐ	4.98	0.99
3.自然の中で味わう空気はおいしいと思う	5.17	0.93
4.野生生物となかよくやっていきたい	3.81	1.30
5.しょうらい自然にかこまれたまちに住みたい	3.69	1.35
自然と生命の関係性	9.09	2.19
6.自分の生命は、自然に支えられていると思う	4.40	1.23
7.自然界のすべてのものは、おたがいにつながってめぐりめぐっていると思う	4.69	1.12
自然への興味と配慮	8.14	1.95
8.自然がどんなしくみになっているかもっと知りたい	3.67	1.22
9.自然がくれたものをむだに使わない	4.47	1.01
合計	38.98	7.58

1) - 3 自然に対する感情反応

「自然に対する感情反応尺度」は20項目すべてが7件法で、「とてもあてはまる」を7点、「まったくあてはまらない」を1点として「回復感」「一体感」「神秘感」「関心・保護」「嫌悪感(のなさ)」の下位尺度ごとに合計したものと、全てを合算した「自然に対する感情反応尺度」を用いて平均点を算出した。なお5つの下位尺度のうち、芝田(2016)の「嫌悪感」は質問項目が「～で嫌だ」のようなネガティブさを問うものになっており、芝田(2016)では他の下位尺度との相関が-0.40から-0.50で、その他の研究でも-0.19~-0.37となっている(芝田, 2019)。そのため、「嫌悪感」は他の下位尺度とは逆のネガティブな感情を捉え

ていると考えられるが、芝田 (2016) は「嫌悪感」を逆転項目とは設定しておらず、他の下位尺度と同じに扱っているため、「自然に対する感情反応尺度」とは「さまざまな心の動きをトータルし、(感情の内容ではなく)感情が動いた大きさを測定するもの」であると解釈される。しかし、本論ではこの尺度を自然に対する感情のポジティブさの推測に用いるために、「嫌悪感」を逆転項目として「嫌悪感(のなさ)」と表記し、7点を1点に、6点を2点に、5点を3点に、3点を5点に、2点を6点に、1点を7点に逆転させて集計した。したがって、全てを合算して求めた本論の「自然に対する感情反応尺度」は芝田 (2016) などの設定した本来の感情反応尺度と直接比較することはできない。本研究では全体の平均点は101.63であった(表4)。

芝田 (2016) は、自然に対する心理反応に関する3つの既存尺度と「自然に対する感情反応尺度」の下位尺度との相関分析を行い、「一体感」が全ての関連尺度と強い相関にあり、この因子が自然との心理的つながりの中心的要素であるとしている。今回の平均を見ると、他の下位尺度に比べて「一体感」は数値的にはやや低いため、自然との

心理的つながりが特に強いとはいえない可能性がある。

2) 主観的幸福感と自然との共生観・自然に対する感情反応の相関分析

〔仮説1) 自然に対する態度が肯定的だと、主観的幸福感も高い〕を検討するために、「主観的幸福感」と「自然との共生観」および「自然に対する感情反応」との相関係数を求めた。その結果、「主観的幸福感」と「自然との共生観」との間には、有意な弱い正の相関が見られ ($r = 0.240$, $F = 195.78$; 表5), 各下位尺度と「自然への親和性」・「自然と生命の関係性」の間に有意な弱い正の相関が見られた(表6)。

「主観的幸福感」と「自然に対する感情反応」の間にも有意な弱い正の相関が見られ($r = 0.268$, $F = 246.81$; 表7), 各下位尺度間では、「人生に対する前向きな気持ち」と「回復感」・「嫌悪感(のなさ)」, 「自信」・「人生に対する失望感(のなさ)」と「嫌悪感(のなさ)」との間に有意な弱い相関が見られた(表8)。

3) 主観的幸福感と過去の自然体験活動の分散分析

次に、「仮説2) 過去の自然体験が現在の主観的幸福感の高低に影響する」を検討するために、分析対象者3193名のうち、過去の自然体験活動の質問項目に欠損のなかった3045名分のデータを用いて、「主観的幸福感」と過去の自然体験活動との関係性を検討した。過去の自然体験を尋ねる17項目(図1)に対する回答について、「何度もある」を3点、「少しある」を2点、「ほとんどない」を1点とし、各質問項目の合計を項目数で割った平均点を算出し、国立青少年教育振興機構(2019)の自然体験の分析をもとに、「多い(=3.0~2.6点)」, 「やや多い(=2.5~2.2点)」, 「ふつう(=2.1~1.8点)」, 「やや少ない(=1.7~1.4点)」, 「少ない(=1.3~1.0点)」の5段階に群分けして、「主観的幸福感尺度」およびその各下位尺度の平均点と1要因参加者間計画の分散分析を行った。その結果、全体平均、各下位尺度平均ともに群の効果は有意であった($df1 = 4$, $df2 = 3040$) (表9)。また、

表4 自然に対する感情反応尺度の平均点

(*は逆転項目)

	平均点	SD
回復感	23.42	4.15
1.緑豊かな自然の眺めを見るとほっとする	6.10	1.06
2.木々に緑を感じて癒される	6.10	1.05
3.きれいな草花を見ると楽しくなる	5.89	1.16
4.緑豊かな自然を眺めていると疲れが吹き飛ぶ	5.32	1.34
一体感	18.06	5.17
5.自然豊かな環境には親近感を感じる	5.30	1.37
6.自然の中に自分の居場所のようなものを感じる	4.41	1.44
7.自然環境に対して強い愛着を感じる	4.32	1.44
8.自然との一体感を強く感じる	4.04	1.42
神秘感	20.00	5.32
9.古くて大きな木からは、何か神秘的なものを感じる	5.11	1.49
10.深い森の中は、何か神秘的なものを感じる	5.24	1.43
11.山の神、森の神など、自然の中には神様がいらっしゃると思う	4.83	1.61
12.山や森に行くと、神秘的な気持ちになる	4.82	1.50
関心・保護	22.06	4.03
13.破壊された自然を見ると悲しくなる	5.59	1.17
14.森林が伐採されていることを考えると悲しくなる	5.06	1.27
15.開発のために自然が減っていくのは悲しい	5.36	1.19
16.自然豊かな場所にゴミが散乱しているのを見ると悲しくなる	6.05	1.00
嫌悪感(のなさ)*	18.09	5.06
17.森や山の中など、自然は暗くて薄気味悪いと思う*	4.52	1.47
18.自然の中に行くとき靴や服が汚れるから嫌だ*	4.77	1.45
19.森や山など、自然の多い場所は不衛生なので嫌だ*	5.00	1.38
20.草花の多い場所は、虫が多くて嫌だ*	3.80	1.74
合計	101.63	17.84

「主観的幸福感尺度」の全体と各下位尺度でHSD法を用いた多重比較を行った結果を以下の表10～14に示した（表中のA1は「多い」、A2は「やや多い」、A3は「ふつう」、A4は「やや少ない」、

A5は「少ない」を示す)。その結果、全体平均、各下位尺度の平均はほぼすべての群間で有意な差が見られた。

表5 主観的幸福感尺度×自然との共生観尺度（全体）

	主観的幸福感尺度	
	<i>r</i>	<i>F</i>
自然との共生観尺度	0.240 **	195.78

$df1 = 1, df2 = 3191$ ** $p < .01$

表6 主観的幸福感尺度×自然との共生観尺度（各下位尺度）

	人生に対する 前向きな気持ち		自信		達成感		人生に対する 失望感のなさ	
	<i>r</i>	<i>F</i>	<i>r</i>	<i>F</i>	<i>r</i>	<i>F</i>	<i>r</i>	<i>F</i>
自然への親和性	0.221 **	164.62	0.175 **	100.77	0.133 **	57.56	0.160 **	84.27
自然と生命の関係性	0.209 **	146.1	0.151 **	74.82	0.122 **	48.07	0.136 **	60.01
自然への興味と配慮	0.197 **	129.17	0.177 **	103.12	0.133 **	57.64	0.121 **	47.39

$df1 = 1, df2 = 3191$ ** $p < .01$

表7 主観的幸福感尺度×自然に対する感情反応尺度（全体）

	主観的幸福感尺度	
	<i>r</i>	<i>F</i>
自然に対する感情反応尺度	0.268 **	246.81

$df1 = 1, df2 = 3191$ ** $p < .01$

表8 主観的幸福感尺度×自然に対する感情反応尺度（各下位尺度）

	人生に対する 前向きな気持ち		自信		達成感		人生に対する 失望感のなさ	
	<i>r</i>	<i>F</i>	<i>r</i>	<i>F</i>	<i>r</i>	<i>F</i>	<i>r</i>	<i>F</i>
回復感	0.249 **	211.24	0.152 **	75.01	0.136 **	60.08	0.181 **	108.22
一体感	0.185 **	113.40	0.186 **	114.25	0.132 **	56.49	0.122 **	47.81
神秘感	0.177 **	103.52	0.129 **	53.64	0.097 **	30.42	0.100 **	32.32
関心・保護	0.166 **	90.36	0.097 **	30.01	0.083 **	22.02	0.092 **	27.17
嫌悪感（のなさ）	0.201 **	133.71	0.207 **	143.47	0.136 **	60.38	0.254 **	219.76

$df1 = 1, df2 = 3191$ ** $p < .01$

表9 主観的幸福感尺度×過去の自然体験活動

	多い ($n = 135$)		やや多い ($n = 432$)		ふつう ($n = 926$)		やや少ない ($n = 1052$)		少ない ($n = 500$)		<i>F</i> 値	効果量 <i>f</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>		
主観的幸福感尺度	37.99	4.36	36.39	4.83	35.71	4.35	34.72	4.51	33.77	5.12	37.15**	0.22
人生に対する前向きな気持ち	10.36	1.26	10.01	1.46	9.84	1.40	9.63	1.43	9.33	1.61	22.26**	0.17
自信	9.54	1.47	9.12	1.58	8.86	1.51	8.55	1.60	8.33	1.69	28.41**	0.19
達成感	8.85	1.46	8.50	1.55	8.37	1.33	8.13	1.44	7.98	1.45	17.03**	0.15
人生に対する失望感のなさ	9.22	1.53	8.75	1.65	8.63	1.56	8.39	1.54	8.11	1.67	19.65**	0.16

$F(4, 3040)$ ** $p < .01$

表10 主観的幸福感尺度全体

(MSe = 21.3399, *p < .05)	
A1 > A2 *	(HSD = 1.2426)
A1 > A3 *	(HSD = 1.1610)
A1 > A4 *	(HSD = 1.1521)
A1 > A5 *	(HSD = 1.2223)
A2 = A3 n.s.	(HSD = 0.7343)
A2 > A4 *	(HSD = 0.7201)
A2 > A5 *	(HSD = 0.8278)
A3 > A4 *	(HSD = 0.5679)
A3 > A5 *	(HSD = 0.6994)
A4 > A5 *	(HSD = 0.6845)

表11 人生に対する前向きな気持ち

(MSe = 2.1141, *p < .05)	
A1 = A2 n.s.	(HSD = 0.3911)
A1 > A3 *	(HSD = 0.3654)
A1 > A4 *	(HSD = 0.3626)
A1 > A5 *	(HSD = 0.3847)
A2 = A3 n.s.	(HSD = 0.2311)
A2 > A4 *	(HSD = 0.2267)
A2 > A5 *	(HSD = 0.2605)
A3 > A4 *	(HSD = 0.1787)
A3 > A5 *	(HSD = 0.2201)
A4 > A5 *	(HSD = 0.2155)

表12 自信

(MSe = 2.5163, *p < .05)	
A1 = A2 n.s.	(HSD = 0.4267)
A1 > A3 *	(HSD = 0.3987)
A1 > A4 *	(HSD = 0.3956)
A1 > A5 *	(HSD = 0.4197)
A2 > A3 *	(HSD = 0.2521)
A2 > A4 *	(HSD = 0.2473)
A2 > A5 *	(HSD = 0.2843)
A3 > A4 *	(HSD = 0.1950)
A3 > A5 *	(HSD = 0.2402)
A4 = A5 n.s.	(HSD = 0.2351)

表13 達成感

(MSe = 2.0498, *p < .05)	
A1 = A2 n.s.	(HSD = 0.3851)
A1 > A3 *	(HSD = 0.3598)
A1 > A4 *	(HSD = 0.3571)
A1 > A5 *	(HSD = 0.3788)
A2 = A3 n.s.	(HSD = 0.2276)
A2 > A4 *	(HSD = 0.2232)
A2 > A5 *	(HSD = 0.2566)
A3 > A4 *	(HSD = 0.1760)
A3 > A5 *	(HSD = 0.2168)
A4 = A5 n.s.	(HSD = 0.2122)

表14 人生に対する
失望感のなさ

(MSe = 2.5309, *p < .05)	
A1 > A2 *	(HSD = 0.4279)
A1 > A3 *	(HSD = 0.3998)
A1 > A4 *	(HSD = 0.3968)
A1 > A5 *	(HSD = 0.4209)
A2 = A3 n.s.	(HSD = 0.2529)
A2 > A4 *	(HSD = 0.2480)
A2 > A5 *	(HSD = 0.2851)
A3 > A4 *	(HSD = 0.1956)
A3 > A5 *	(HSD = 0.2409)
A4 > A5 *	(HSD = 0.2357)

「自然への興味と配慮」「回復感」が5%水準で、「関心・保護」が1%水準で、B群よりもA群の方が有意に高かった。各尺度全体では有意な差は見られなかった(表16)。

③の「教育は親が選ぶ(A)か、子どもの自主性(B)か」については、「自然との共生観」と「自然への親和性」においてのみ、1%水準でA群よりもB群の方が有意に高かった。「自然に対する感情反応」は全体でも、どの下位尺度でも有意な差は見られなかった(表17)。

④の「名の通った大学に行ってほしい(A)か、こだわらない(B)か」については、「自然への親和性」と「嫌悪感(のなさ)」が1%水準で、「一体感」が5%水準で、A群よりもB群の方が有意に高かった。しかし、各尺度の全体では有意な差は見られなかった(表18)。

⑤の「わがまは厳しくしかる(A)か、優しく言い聞かせる(B)か」については、すべての尺度でA群よりもB群の方が1%水準で有意に高い結果となった(表19)。

⑥の「能力は生まれつき決まっている(A)か、環境による(B)か」については、すべての尺度でA群よりもB群の方が1%水準で有意に高い結果となった(表20)。

⑦の「文字や数は早くから教える(A)か、関心を持ってから(B)か」については、「関心・保護」が5%水準で、それ以外の全ての尺度が1%水準で、A群よりもB群の方が有意に高かった(表21)。

4) 自然への肯定的態度と教育観の分散分析

「仮説3) 自然に対する態度は保護者の(乳幼児に対する)教育観に影響する」を検討するために、教育観に関する質問にAと答えた群(以下、A群)とBと答えた群(以下、B群)に分け、「自然との共生観尺度」「自然に対する感情反応尺度」と各下位尺度の平均点に差があるのかを比較するために1要因参加者間計画の分散分析を行った。その結果は以下の通りである(表15~21)。

①の「自分の生き方を優先する(A)か、子どものためにがまんする(B)か」については、「自然との共生観」「自然と生命の関係性」「神秘感」が1%水準で、「自然との親和性」「自然への興味と配慮」「自然に対する感情反応」「回復感」「一体感」が5%水準で、B群よりもA群の方が有意に高かった。「関心・保護」と「嫌悪感(のなさ)」については有意差が見られなかった(表15)。

②の「3歳までは母親がいつも一緒がいい(A)か、一緒でなくてもいい(B)か」については、

表15 自然への態度×教育観① 分散分析

① (N=3185)	A (N=1707)		B (N=1478)		F 値	効果量f
	M	SD	M	SD		
	自然との共生観尺度	39.36	7.67	38.53		
自然への親和性	21.93	4.42	21.53	4.33	6.60*	0.05
自然と生命の関係性	9.22	2.18	8.94	2.17	13.30**	0.06
自然への興味と配慮	8.20	2.00	8.06	1.87	4.22*	0.04
自然に対する感情反応尺度	102.34	18.09	100.81	17.51	5.76*	0.04
回復感	23.56	4.20	23.25	4.08	4.42*	0.04
一体感	18.25	5.30	17.85	5.00	4.73*	0.04
神秘感	20.35	5.23	19.59	5.36	16.27**	0.07
関心・保護	22.09	4.03	22.02	4.03	0.29	0.01
嫌悪感(のなさ)	18.07	5.07	18.09	5.04	0.02	0.00

F (1, 3183) *p < .05 **p < .01

表16 自然への態度×教育観② 分散分析

② (N=3184)	A (N=1231)		B (N=1953)		F 値	効果量f
	M	SD	M	SD		
	自然との共生観尺度	39.22	7.51	38.80		
自然への親和性	21.87	4.41	21.65	4.37	1.90	0.02
自然と生命の関係性	9.12	2.16	9.06	2.19	0.45	0.01
自然への興味と配慮	8.22	1.92	8.07	1.96	4.78**	0.04
自然に対する感情反応尺度	102.25	18.35	101.19	17.50	2.66	0.03
回復感	23.61	4.09	23.28	4.19	4.99*	0.04
一体感	18.16	5.30	17.99	5.08	0.77	0.02
神秘感	20.04	5.43	19.96	5.24	0.18	0.01
関心・保護	22.32	4.15	21.89	3.94	8.8**	0.05
嫌悪感(のなさ)	18.10	5.20	18.06	4.96	0.04	0.00

F (1, 3182) *p < .05 **p < .01

表17 自然への態度×教育観③ 分散分析

③ (N=3180)	A (N=462)		B (N=2718)		F 値	効果量f
	M	SD	M	SD		
	自然との共生観尺度	37.93	7.79	39.14		
自然への親和性	21.02	4.64	21.86	4.32	14.6**	0.07
自然と生命の関係性	8.91	2.17	9.12	2.18	3.52	0.03
自然への興味と配慮	7.99	1.97	8.15	1.94	2.78	0.03
自然に対する感情反応尺度	100.52	18.26	101.81	17.76	2.04	0.03
回復感	23.06	4.59	23.47	4.07	3.75	0.03
一体感	17.74	5.24	18.12	5.15	2.11	0.03
神秘感	19.80	5.34	20.03	5.31	0.72	0.02
関心・保護	21.95	4.16	22.08	4.01	0.42	0.01
嫌悪感(のなさ)	17.95	5.17	18.09	5.04	0.30	0.01

F (1, 3178) *p < .05 **p < .01

表18 自然への態度×教育観④ 分散分析

④ (N=3181)	A (N=489)		B (N=2257)		F 値	効果量f
	M	SD	M	SD		
	自然との共生観尺度	38.42	4.53	39.06		
自然への親和性	21.20	4.42	21.84	4.37	8.97**	0.05
自然と生命の関係性	9.06	2.14	9.09	2.19	0.08	0.00
自然への興味と配慮	8.16	1.96	8.12	1.94	0.14	0.01
自然に対する感情反応尺度	101.02	17.99	101.74	17.82	0.68	0.01
回復感	23.38	4.39	23.42	4.11	0.03	0.00
一体感	17.59	5.27	18.15	5.14	4.91*	0.03
神秘感	20.23	5.31	19.96	5.31	1.11	0.02
関心・保護	22.30	3.85	22.02	4.06	1.00	0.03
嫌悪感(のなさ)	17.50	5.21	18.18	5.02	7.56**	0.05

F (1, 3179) *p < .05 **p < .01

表19 自然への態度×教育観⑤ 分散分析

⑤ (N=3157)	A (N=900)		B (N=2257)		F 値	効果量f
	M	SD	M	SD		
	自然との共生観尺度	37.19	7.76	39.65		
自然への親和性	20.84	4.46	22.09	4.30	53.45**	0.13
自然と生命の関係性	8.69	2.33	9.24	2.10	41.95**	0.12
自然への興味と配慮	7.66	1.96	8.31	1.91	72.58**	0.15
自然に対する感情反応尺度	98.49	17.76	102.96	17.71	39.10**	0.11
回復感	22.78	4.55	23.67	3.96	29.43**	0.10
一体感	17.36	5.22	18.34	5.12	23.24**	0.09
神秘感	19.35	5.32	20.25	5.29	18.34**	0.08
関心・保護	21.49	4.07	22.28	4.00	24.75**	0.09
嫌悪感(のなさ)	17.48	5.11	18.31	5.03	17.19**	0.07

F (1, 3155) *p < .05 **p < .01

表20 自然への態度×教育観⑥ 分散分析

⑥ (N=3177)	A (N=334)		B (N=2843)		F 値	効果量f
	M	SD	M	SD		
	自然との共生観尺度	37.36	7.99	39.16		
自然への親和性	20.67	4.47	21.87	4.32	22.63**	0.08
自然と生命の関係性	8.84	2.37	9.11	2.16	4.82**	0.04
自然への興味と配慮	7.85	2.07	8.16	1.93	7.96**	0.05
自然に対する感情反応尺度	96.36	17.82	102.28	17.75	33.13**	0.10
回復感	22.37	4.53	23.54	4.08	24.16**	0.09
一体感	16.80	5.47	18.22	5.10	22.85**	0.08
神秘感	19.17	5.70	20.10	5.26	9.16**	0.05
関心・保護	21.17	4.27	22.16	3.99	18.40**	0.08
嫌悪感(のなさ)	16.85	5.13	18.23	5.03	22.58**	0.08

F (1, 3175) *p < .05 **p < .01

表21 自然への態度×教育観⑦ 分散分析

⑦ (N=3183)	A (N=754)		B (N=2429)		F 値	効果量f
	M	SD	M	SD		
	自然との共生観尺度	37.86	7.80	39.31		
自然への親和性	21.07	4.54	21.95	4.31	22.99**	0.09
自然と生命の関係性	8.83	2.24	9.16	2.16	13.38**	0.06
自然への興味と配慮	7.94	1.99	8.19	1.93	9.25**	0.05
自然に対する感情反応尺度	99.07	18.79	102.42	17.46	20.38**	0.08
回復感	22.91	4.64	23.57	3.97	14.45**	0.07
一体感	17.40	5.23	18.27	5.13	16.24**	0.07
神秘感	19.54	5.53	20.14	5.24	7.27**	0.05
関心・保護	21.74	4.40	22.15	3.90	5.96*	0.04
嫌悪感(のなさ)	17.45	5.04	18.27	5.04	15.12**	0.07

F (1, 3181) *p < .05 **p < .01

5) 主観的幸福感と教育観の分散分析

「仮説4) 主観的幸福感が保護者の(乳幼児に対する)教育観に影響する」を検討するために、A群とB群について「主観的幸福感」とその下位尺度の平均点に差があるのかを比較し、1要因参加者間計画の分散分析を行った。その結果は以下の通りである(表22~28)。

①の「自分の生き方を優先する(A)か、子どものためにがまんする(B)か」については、どの尺度でも有意な差は見られなかった(表22)。

②の「3歳までは母親がいつも一緒がいい(A)か、一緒でなくてもいい(B)か」については、「主観的幸福感」と「達成感」のみが1%水準でB群よりもA群の方が有意に高かった。(表23)。

③の「教育は親が選ぶ(A)か、子どもの自主性(B)か」については、どの尺度でも有意な差は見られなかった(表24)。

④の「名の通った大学に行ってほしい(A)か、こだわらない(B)か」については、「主観的幸福感」が5%水準で、下位尺度の「自信」と「達成感」が1%水準でB群よりもA群の方が有意に高かった(表25)。

⑤の「わがまは厳しくしかる(A)か、優し

く言い聞かせる (B) か」については、「主観的幸福感」、「人生に対する前向きな気持ち」、「人生に対する失望感のなさ」が1%水準でA群よりもB群の方が有意に高かった (表26)。

⑥の「能力は生まれつき決まっている (A) か、環境による (B) か」については、全ての尺度において1%水準でA群よりもB群の方が有意に高かった (表27)。

⑦の「文字や数は早くから教える (A) か、関心を持ってから (B) か」については、全ての尺度において有意な差は見られなかった (表28)。

表22 主観的幸福感尺度×教育観① 分散分析

① (n=3185)	A 子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい (n=1707)		B 子どものためには、自分ががまんするのほしかたない (n=1478)		F値	効果量f
	M	SD	M	SD		
	主観的幸福感尺度	35.34	4.84	35.12		
人生に対する前向きな気持ち	9.73	1.50	9.73	1.44	0.00	0.00
自信	8.76	1.64	8.72	1.58	0.51	0.01
達成感	8.30	1.44	8.20	1.43	3.86	0.03
人生に対する失望感のなさ	8.54	1.64	8.46	1.56	1.81	0.02

F (1, 3183) *p < .05 **p < .01

表23 主観的幸福感尺度×教育観② 分散分析

② (n=3184)	A 子どもが3歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい (n=1231)		B 母親がいつも一緒になくても、愛をもって育てればいい (n=1953)		F値	効果量f
	M	SD	M	SD		
	主観的幸福感尺度	35.53	4.77	35.06		
人生に対する前向きな気持ち	9.77	1.49	9.70	1.46	1.72	0.02
自信	8.81	1.61	8.69	1.61	3.81	0.03
達成感	8.37	1.40	8.18	1.46	13.74**	0.07
人生に対する失望感のなさ	8.56	1.62	8.47	1.59	2.47	0.03

F (1, 3182) *p < .05 **p < .01

表24 主観的幸福感尺度×教育観③ 分散分析

③ (n=3180)	A 子どもの教育について、親が判断して選ぶのがよい (n=462)		B 子どもの教育について、子どもの自主性を養うのがよい (n=2718)		F値	効果量f
	M	SD	M	SD		
	主観的幸福感尺度	35.47	4.89	35.19		
人生に対する前向きな気持ち	9.75	1.50	9.72	1.47	0.14	0.01
自信	8.83	1.58	8.72	1.61	1.77	0.02
達成感	8.35	1.48	8.24	1.43	2.11	0.03
人生に対する失望感のなさ	8.53	1.67	8.50	1.59	0.21	0.01

F (1, 3178) *p < .05 **p < .01

表25 主観的幸福感尺度×教育観④ 分散分析

④ (n=3181)	A 世間での名の通った大学に通ってほしい (n=489)		B 大学進学や学校名にはこだわらない (n=2257)		F値	効果量f
	M	SD	M	SD		
	主観的幸福感尺度	35.69	4.79	35.16		
人生に対する前向きな気持ち	9.71	1.54	9.73	1.45	0.05	0.00
自信	8.92	1.60	8.71	1.61	7.12**	0.05
達成感	8.52	1.43	8.21	1.43	19.23**	0.08
人生に対する失望感のなさ	8.53	1.61	8.50	1.60	0.11	0.01

F (1, 3179) *p < .05 **p < .01

表26 主観的幸福感尺度×教育観⑤ 分散分析

⑤ (n=3157)	A わがまを言ったなら、わがまを言った方がよい (n=900)		B わがまを言ったら分るまで優しく言い聞かせるのがよい (n=2257)		F値	効果量f
	M	SD	M	SD		
	主観的幸福感尺度	34.76	4.97	35.43		
人生に対する前向きな気持ち	9.56	1.50	9.80	1.45	17.32**	0.07
自信	8.67	1.67	8.76	1.58	2.06	0.03
達成感	8.18	1.50	8.29	1.41	3.81	0.03
人生に対する失望感のなさ	8.34	1.67	8.57	1.56	12.88**	0.05

F (1, 3155) *p < .05 **p < .01

表27 主観的幸福感尺度×教育観⑥ 分散分析

⑥ (n=3177)	A 子どもは生まれつき能力が決まっていると思う (n=234)		B 子どもは育つ環境によってどのような能力も伸ばせると思う (n=2843)		F値	効果量f
	M	SD	M	SD		
	主観的幸福感尺度	33.37	5.58	35.47		
人生に対する前向きな気持ち	9.15	1.78	9.80	1.42	57.73**	0.13
自信	8.35	1.76	8.79	1.58	22.37**	0.06
達成感	7.94	1.68	8.29	1.40	18.42**	0.06
人生に対する失望感のなさ	7.92	1.90	8.57	1.55	50.43**	0.13

F (1, 3175) *p < .05 **p < .01

表28 主観的幸福感尺度×教育観⑦ 分散分析

⑦ (n=3183)	A 文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい (n=754)		B 文字や数は子どもが関心をもつようになってから教えるのがよい (n=2429)		F値	効果量f
	M	SD	M	SD		
	主観的幸福感尺度	35.02	4.98	35.30		
人生に対する前向きな気持ち	9.64	1.51	9.75	1.46	3.04	0.03
自信	8.71	1.63	8.75	1.60	0.37	0.01
達成感	8.22	1.53	8.27	1.40	0.63	0.01
人生に対する失望感のなさ	8.44	1.69	8.52	1.57	1.49	0.02

F (1, 3181) *p < .05 **p < .01

6. 考察

1) 主観的幸福感と自然に対する態度の関係

「主観的幸福感」と「自然との共生観」には、弱いながらも有意な正の相関があった。また、各下位尺度の相関分析では「主観的幸福感尺度」の「人生に対する前向きな気持ち」と「自然との共生観尺度」の「自然への親和性」および「自然と生命の関係性と」の間に有意な弱い正の相関があった。さらに、「主観的幸福感」と「自然に対する感情反応」においても有意な弱い正の相関が確認された。そして、各下位尺度では「人生に対する前向きな気持ち」と「自然に対する感情反応尺度」の「回復感」および「嫌悪感 (のなさ)」の間に有意な弱い正の相関があった。これらのことから、自然が親しみや癒しを感じる対象として肯定的に捉えられ、自分の人生の満足感にも関係しているものと考えられる。

独立行政法人森林総合研究所 (2011)によると、都市部より森林環境の方が自律神経活動をリラッ

クスさせる効果があり、農地・海岸よりも森林の方がストレス軽減効果が高いとされている。つまり、自然環境にふれることは心理的健康である主観的幸福感を向上させることにつながるといえる。また、芝田（2016）は、「近隣に自然が多いほど自然が知覚されやすくなり、自然に対して心理的つながりを感じやすくなる」と述べている。調査を行った札幌市と飯田市には森林環境が身近にあることから、近隣に自然にふれあえる場所があることで自然に対して心理的つながりを感じやすくなり、今回の有意な相関関係を示したのではないかと推察する。

2) 主観的幸福感と過去の自然体験の関係

過去の自然体験の回答を得点化し、「多い」「やや多い」「ふつう」「やや少ない」「少ない」の5段階に分類した結果、対象者の過去の自然体験は（「多い」「やや多い」を合わせて18.62%のため）決して多いとはいえないが、「主観的幸福感」と相関分析を行った結果、過去の自然体験が多いほど、「主観的幸福感」も有意に高く、小さいながらも効果があることがわかった。さらに、「主観的幸福感」全体と下位尺度の「人生に対する失望感のなさ」においては「多い」と「やや多い」の間にも有意な差が見られた。これらのことから、過去に自然体験をたくさん行っていた人ほど主観的幸福感も高くなる傾向があるといえる。さらに、国立青少年教育振興機構（2019）が、保護者の自然体験が多いほど子どもの自然体験が豊富になる傾向が見られたと報告していることから、「保護者がたくさん自然体験を行うことで子どもの自然体験が増える→その子どもが成長するにつれて自然体験は多くなり「過去の自然体験が豊富」な大人となる→このような人は主観的幸福感が高くなる」という流れが推察される。過去の自然体験を見ると、「スキーや雪遊びなど雪の中での活動」を何度もしたことがあると答えた人が最も多かった（52.98%）。飯田市の平均年間降雪量は57cmであり、札幌市（597cm）ほど降雪量は多くはないが、近くにスキー場もあることから、雪の中での活動を始め、身近にある森林環境も活かしながら自然

体験活動をたくさん行えることが子育てに影響していると考えられる。したがって、長野県をはじめとする自然保育が広がりつつある地域では、将来の主観的幸福感の高まりが期待される。

3) 自然への肯定的態度と教育観の関係

ここでは1%水準で有意差があったものを中心に考察する。

①「A：子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい／B：子どものためには、自分ががまんするのはしかたない」、②「A：子どもが3歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい／B：母親と一緒になくても、愛をもって育てればいい」、③「A：子どもの教育について、親が判断して選ぶのがよい／B：子どもの教育について、子どもの自主性を重んじるのがよい」、④「A：世間で名の通った大学に通ってほしい／B：大学進学や学校名にはこだわらない」、⑦「A：文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい／B：文字や数は子どもが関心をもつようになってから教えるのがよい」では、群間に有意差が見られたものもあったが、効果があったとは言い難い結果であった。自然への肯定的態度とこれらの教育観については、他の要因がこれらの関係を紐づけていると考えられる。

⑤「A：わがママを言ったら、厳しくしかりつけるのがよい／B：わがママを言ったら分かるまで優しく言い聞かせるのがよい」では、全ての尺度においてB群の方が有意に高く、小さいながらも効果があった。自然に対して肯定的・受容的である保護者は、子どもに対しても肯定的・受容的で一方的な態度をとらない様子がうかがえる。

⑥「A：子どもは生まれつき能力が決まっていると思う／B：子どもは育つ環境によってどのような能力も伸ばせると思う」でも、全ての尺度で有意にB群が高く、小さいながらも効果があった。自然環境は常に同じではなく、変化していくものであり、自然を肯定的に捉えている傾向が、子どもの変化も受け入れて期待するような姿勢につながっているものと考えられる。

4) 主観的幸福感と教育観の関係

ここでは1%水準で有意差があったものを中心に考察する。

②, ④, ⑤の質問項目では、有意に高かった群があったが、効果があったとは言い難い結果であった。有意差のある項目が少なく、全体的に見ると差がないように見える。

⑥では、全てにおいて有意にB群が高かったが十分に効果があるとは言い難かった。「主観的幸福感尺度」は過去から現在まで(これまでの人生)について聞いている質問が多く、回答者自身が、変化する生活環境の中でさまざまな能力を伸ばして幸福感を獲得してきたという意識をもっているのではないかと考える。人生に対し前向きに考えている人は、自分の可能性を決めつけるのではなく、未来に期待していることが多いと考えられるため、子どもの人生についても前向きで可能性を信じているのではないかと推察する。

5) 考察のまとめ

以上のことから、主観的幸福感と自然に対する肯定的態度には相関関係があること、過去の自然体験が多いと現在の主観的幸福感も高くなること、自然に対する態度と主観的幸福感保護者の教育観に影響することが明らかになり、仮説1)～4)は全て立証された。

仮説が全て立証されたことから、保護者の主観的幸福感や自然に対する肯定的態度は保護者の教育観に影響を与えていると言える。乳幼児の教育環境(遊びの内容や幼稚園・保育園等の選択、子どもへの働きかけなど)の多くが保護者の教育観に大きく左右されることを考えれば、主観的幸福感や自然に対する肯定的態度は子どもの教育環境に大きな影響を与えていることになる。

国立青少年教育振興機構(2019)は、保護者の自然体験が多いほど、子どもの自然体験が豊富になる傾向が見られたと報告しており、自然体験活動をたくさん行った子どもほど、自然体験活動に対して肯定的なイメージをもっていて気になる環境問題の数が多い(独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センター編, 2004)との報告も

ある。本研究では過去の自然体験の多寡と現在の主観的幸福感の高低に相関があることや、自然への肯定的・受容的態度が保護者の教育観に影響することはわかったが、それらの因果関係や要因の詳細の解明には至っていない。しかしこれらの事実は、保護者の自然への肯定的・受容的態度により育まれた教育観により子どもが自然に目を向けるような教育環境が作られるようになることや、主観的幸福が高まることで生活の質が向上し、持続可能な社会に向けた行動が促進されるようになることを期待させる。

7. 結論

保護者の主観的幸福感や自然観が乳幼児の教育環境に与える影響を調査した結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 自然に対する肯定的な態度(自然との共生観・自然に対する感情反応)と主観的幸福感の間には正の相関関係がある。
- 2) 過去の自然体験が多いほど、主観的幸福感も高い傾向にあり、小さいながらも効果がある。
- 3) 自然への肯定的な態度(自然との共生観・自然に対する感情反応)は、保護者の教育観に影響する。
- 4) 主観的幸福感、保護者の教育観の一部に影響する。

今回は、効果量の十分でないものもあり、主観的幸福感や自然に対する肯定的態度を決定づける要因や因果関係までは明らかにできていないが、自然を身近に感じることや自然体験の多寡が教育観に影響を与えることがわかったため、今後その具体的な要因における因果関係を明らかにしていけば、持続可能な社会の実現を担う子どもたちに対する「自然に対する肯定的な感情」を育む教育環境の構築への示唆が得られるものと考えられる。

また、これまで幼児教育に関しては保育者とその養成期間における取り組みなどの分析が先行してきたが、今後は幼児を取り巻くもう一つの重要な当事者である保護者のありようにも、よりいっ

そう目を向けていく必要がある。

謝 辞

本論文は、筆者の1人田口の修士論文をもとに作成したものである。修士論文の研究にあたり、アンケートにご協力いただいた札幌市と飯田市の幼稚園・保育園・認定こども園の園長先生および保護者の皆様に心から感謝いたします。また、園との調整にご尽力くださった札幌市教育委員会および飯田市役所子育て支援課、元藤女子大学准教授の山田りよ子氏、そしてアンケートの入力作業にご協力をいただいた飯田女子短期大学の学生の皆様、発送から集計までお手伝いいただいた北海道教育大学岩見沢校環境教育学研究室の学生・卒業生の坂入千紘・渡邊恋子・阿部大和・下司玲奈・米井 希の各氏、および能條 祥氏・田中千紗子氏に重ねて感謝申し上げます。

注1) 園向けアンケート及び保護者向けのアンケートの実物は以下を参照のこと。

園向け；<https://xn--tqqu05cjmidspqnbmy8e.net/wp-content/uploads/2021/01/園向けアンケート完成版-1.pdf> (2021年3月25日アクセス)

保護者向け；<https://xn--tqqu05cjmidspqnbmy8e.net/wp-content/uploads/2021/01/20幼児の保護者アンケート.pdf> (2021年3月25日アクセス)

引用・参考文献

青木聡子 (2013) 幼稚園児をもつ夫婦の協同育児が主観的幸福感に及ぼす影響—育児計画における連携・調整に着目して—。国士館人文学, (45) : 1-10

ベネッセ教育総合研究所 (2016) 第5回幼児の生活アンケート。ベネッセ教育総合研究所 : 3-63

独立行政法人森林総合研究所 (2011) 異なる自然環境におけるセラピー効果の比較と身近な森林のセラピー効果に関する研究。森林総合交付金プロジェクト研究成果集, 46 : 8-19

伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 (2003) 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討。心理学研究, 74(3) : 276-281.

伊藤裕子・相良順子・池田政子 (2004) 既婚者の心理的健康に及ぼす結婚生活と職業生活の影響。心理学研究,

75(5) : 435-441

梶木典子・渡瀬章子・田中智子 (2002) 都市部の子どもの遊びの実態と保護者の意識。日本家政学会誌, 53(9) : 943-951

小林小夜子 (2020) 幸せの国ブータンの就学前集団教育に関する調査研究 (報告) —私立幼稚園3か園の現地調査から—。福山市立大学教育学部研究紀要, 8 : 35-43

独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センター編 (2004) 青少年の自然体験活動等に関する実態調査。独立行政法人国立青少年教育振興機構 : 7-8, 12, 17

国立青少年教育振興機構 (2010) 「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」報告書。独立行政法人国立青少年教育振興機構 : 96-103

国立青少年教育振興機構 (2016) 青少年の体験活動等に関する実態調査 (平成26年度調査)。独立行政法人国立青少年教育振興機構 : 71-73

国立青少年教育振興機構 (2019) 青少年の体験活動等に関する実態調査 (平成28年度調査)。独立行政法人国立青少年教育振興機構 : 18-21

佐々木健吾 (2013) 行動や習慣が主観的幸福度に与える影響。名古屋学院大学論集社会科学編, 49(3) : 27-42

佐藤正弘 (2012) 幸福度指標と持続可能性指標。内閣府幸福に関する研究会 ; <https://www5.cao.go.jp/keizai2/koufukudo/shiryou/7shiryou/7.pdf> (2021年6月22日アクセス)

芝田征司 (2016) 自然に対する感情反応尺度の作成と近隣緑量による影響の分析。心理学研究, 87(1) : 50-59

芝田征司 (2019) 幼少期の環境と自然とのつながり, 風景回復感の関係(2)。日本心理学会第83回大会講習要旨, 1037.

竹森香似・柏木智子 (2018) 学校・家庭・地域間のソーシャル・キャピタルと保護者の主観的幸福感。東京大学大学院教育学研究科教育行政学論叢, (38) : 85-94

寺崎正治・網島啓司・西村智代 (1999) 主観的幸福感の構造。川崎医療福祉学会誌, 9(1) : 43-48

山田亮・白岡千帆里・能條歩 (2020) 福島県在住の小中学生を対象とした森林体験を伴う自然体験活動が生きる力と自然との共生観に及ぼす効果 (2020) 日本森林学会誌, 102(1) : 69-76

山本裕之・平野吉直・内田幸一 (2005) 幼児期に豊富な自然体験活動をした児童に関する研究。国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要, (5) : 69-80

(田口 夏美 岩見沢校大学院2020年度修了)
(能條 歩 岩見沢校教授)
(田中 住幸 飯田女子短期大学准教授)
(中本 貴規 飯田女子短期大学助教)
(陳 倩倩 北海道教育大学大学院生)
(板垣 有咲 北海道教育大学大学院生)